

義経幻殺録

井沢元彦

講談社

義経幻殺録

定価 一一〇〇円

第1刷発行 昭和61年12月10日

第2刷発行 昭和62年1月10日

著者 井沢元彦

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21
電話 東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 株式会社廣済堂

製本所 大製株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© MOTOHIKO IZAWA 1986 Printed in Japan

義經幻殺錄

装帧

安彦勝博

魔都上海、それは龍之介を魅了する妖しの街だった。
港、達磨船、緑色の電車、アスファルトの大道、赤煉瓦のビルディング。街路は西洋人が大手
を振って歩いている。

パブリック・ガーデン、「犬と支那人入るべからず」の看板。そして阿片窟、ランプと長柄の
煙管、快楽の地獄を極めた男女の貌。

大正十年（一九二一）春。

新進気鋭の作家芥川龍之介が、当時支那と呼ばれた中国の上海に上陸したのは、その年の三月
のことだった。

大阪毎日新聞社の海外視察員としてである。龍之介にとっても洋行は初めての経験だった。

龍之介はまず病院のベッドの上に居を定めた。自ら望んだわけではない。上陸した、その翌日
に感冒をこじらせ肋膜炎を併発したのだ。

入院は三週間以上にも及んだ。

龍之介はその間、決して従順な患者ではなかった。

体力が回復してくると、せっかく異郷の地にあるのに、日本人経営の病院にいるのが、たまらなく馬鹿馬鹿しいことに思えてきたのである。

「ねえ、ジョーンズ君。きみもそう思うだろう」

龍之介は見舞いにきたジョーンズに、ベッドの上から愚痴を洩らした。

ジョーンズは西洋人らしく、肩をすくめ大仰なぜスチャアで、

「そうですね、芥川さん」

と、達者な日本語で答えた。

ジョーンズはかつてロイター通信の特派員として、東京に駐在していたことがある。

龍之介がかなり英語が使えることもあって二人は親しくなり、その後上海に配置がえとなったジョーンズと、この旅行を機会に久し振りに会ったのである。

ジョーンズは、異郷で病んだ龍之介の無聊を慰めるため、ほとんど毎日のように見舞いに来てくれた。

龍之介は退屈しきったかのように言った。

「どこかへ食事にでも連れて行ってくれないか」

「だめだめ、芥川さん。病人は療養が第一ですよ」

龍之介は不満顔で、

「これじゃ、何のために遠路はるばるやってきたのか、わかりやしない。考えてもみたまえ。僕は初めてここへ着いた日に、きみと一緒に食事に行つて以来、まるでこの街を見ていないんだから」

ジョーンズは意味ありげな微笑をうかべ、

「芥川さん、本当にそうですか」

と、言葉を返した。

龍之介はぎくりとしたが、内心の動揺を隠して、

「きみは何を言いたいんだね」

と、問い返した。

「時々、病院を抜け出しているのではありませんか。街であなたを見たという人がいますよ」

「ジョーンズ君、いつも感心するんだが、きみの日本語は大したものだね」

「お褒めにあずかって光栄です。でも私のは耳学問ですから」

「いやあ、どうしてどうして、それは謙遜というものだよ」

「日本語ならフレッドのほうがじょうずです。そう思いませんか、芥川さん」

フレッドというのは、彼の後任の東京特派員である。日本語は確かにうまいし、陽気な性格なのだが、何故か龍之介は好きになれなかった。

「だが、僕はきみのほうが話しやすい」

「そう言わずに、フレッドの話も聞いてやって下さい」

そう言ってジョーンズは椅子から立ち上がった。

「もう帰るのかい」

龍之介は引き止めたような顔をした。

「はい、仕事がありますから」

ジョーンズはドアのところで、一度振り返ると、

「芥川さん、夜遊びはいけませんよ。ここは東京じゃありません。長江の河口に死体が浮くのは珍しいことじゃありませんからね。特に共同租界へは絶対に一人で行っちゃいけませんよ」

龍之介はしぶしぶ頷いた。

だが、夜になると龍之介は、病院のメイドに買っておかせた支那服に着替えていた。

つくづく作家というのはアマノジャクな性癖を持っていると思う。

ジョーンズに釘を刺されなければ、いつものように近くのカッフェでコーヒーの一杯も飲んでくれるだけで、充分満足していただろう。しかし今夜は租界までいかないと、それも日本以外の外国の租界でないと、気がおさまらなかった。

言うまでもなく、租界は支那の領土内にありながら主権の及ばない区域である。

清朝を滅亡へと導いた阿片も、租界の中ではおおびらに取引できる。何をしようと支那の官憲は手出しできない。したがって、租界には悪の華が咲き誇っているのである。

龍之介は支那服で、そっと病院を抜け出した。

ほんの十年昔なら、この扮装は役にたたなかったろう。清朝が健在なら、頭髮は弁髪でなければならなかった。あの、口の悪い西洋人が「豚のしつぽ」とののしった、独特のお下げ髪である。頭頂部だけを残して、他の部分は全部剃りあげる。だから一目で清国人かどうかかわかってしまう。

だが、それは十年前までの話だ。

いまでも清に義理立てして、弁髪をとおしている人間もいるが、若い世代は古い風俗を捨てていた。明治におけるザンギリ頭のように、青年ほど新しい流行に敏感だ。

かくして三十歳の龍之介が支那人に化けるのに、なんの不都合もなくなったのである。

龍之介は俥屋くるまやをよびとめ、日本とは違った極彩色に塗りたてられた人力俥に乗って、英米の共同租界を目指した。

租界の中は思ったより清潔で、建物にも秩序が感じられた。

暗黒街という言葉に憧れていた龍之介は、すくなくらず落胆した。

俥を捨てた龍之介はほんの少し歩き、路上に汚物が落ちていないのを見て、今度はおおいに感心した。この地に着いてから龍之介は人々があまり汚れというものを気にしないことに辟易へきえきしていたのだ。一流の食堂でも、まともな便所すらないところが多かった。それは龍之介の繊細な神経を逆撫でしていたのである。

龍之介は最初に目に入ったカッフェの、毒々しい看板にひかれて、中に入った。

ピアノがけたたましい音を響かせていた。

英国海軍の水兵が数人、化粧の濃い女たちと大声でふざけあっていた。他にも客はいる。背広をきた白人と、得体の知れぬ支那人たちである。

白人ばかりならば、さすがの龍之介もそのままきびすを返しただろう。

しかし白人専用というわけでもなさそうだ。龍之介はそのまま奥の席に腰を下ろした。

女が抱きついてきた。ドレスは着ているが西洋人ではない。

「不要フヤク」

その言葉がついつい口からでた。

上海に上陸して、初めておそわったこの国の言葉である。

うるさくつきまとう車夫や物売りを、追い払うまじないのようなものだ。意味は読んで字の如しである。

女は怒ったのか早口の支那語でわめいた。

龍之介はふところから財布を取り出し、女に金を与え、何か飲むものが欲しいと英語で頼んだ。

女の機嫌はたちまちなおった。

スコッチ・ウィスキーが運ばれてきたので、龍之介は舐めるだけにとどめ、あたりを觀察した。酒はもともと飲む気はない。入場料のつもりである。

女がまた首に手をまわしてきた。

龍之介は今度は英語で、もの柔らかく言って、女の手をふりほどいた。

女は侮辱されたと感じたのか、憤然として立ち上がり行ってしまった。

龍之介は苦笑して、今度こそ誰にも邪魔されずに觀察を続けられると思った。

あらためて見ると、このカフェの客はそれほど悪人揃いでもなさそうだし、しばらく座っているうちには雰囲気になじめそうだ。

そう思いはじめた矢先、奥の方から背の高い瘦せた支那服の男が現れ、龍之介のテーブルに向かいあわせに座った。

龍之介はいぶかしげに男の顔を見た。

不思議な感じのする青年だった。

まだ若く、いわゆる美男ではないが、鼻筋のおつた理知的な貌かおをしている。髪は長くモジャモジャとのび放題で、その髪に指を突っ込んで引っ掻き廻しながら、青年は口を開いた。

「あなたは日本人ですね」

断定する口調だった。

龍之介は相手の目的がわからず、沈黙を守った。

青年は微笑を浮かべて、

「あなたは上海に来てまだ日が浅い。今日は初めて租界の夜を見物にやってきた。そうじゃありませんか」

「どうして、わかるのかね」

龍之介は内心の驚きを隠して言った。

「主として人間観察の結果ですよ」

青年はあっさりと答えると、

「一杯おごってくれませんか、あなたにとって興味深いお話をしましょう」

龍之介は新手のたかりかと一瞬失望したが、思い直してウェ이터を呼んだ。小説家というものは、いつも面白い話に飢えているものなのだ。

「いただきます」

青年は運ばれてきたウイスキーを一息にあおった。

「で、話とは何だね」

青年が口を開かないので、龍之介は催促した。

青年は悪戯いたづらっぽく笑って、

「いや、たいしたことじゃありません。ただこれをお目にかけたかっただけで」

と、ふところから皮製の財布を取り出した。龍之介ははじめそれが何を意味するのかわからなかった。

やがて気が付いた龍之介の顔が紅潮した。

それは龍之介自身の財布だったのである、しかも今の今まで懷中にあつたものだ。

「まさか、きみは——」

「おっと、それはぬれぎぬですよ。僕はあなたに指一本触れていません」

「では、誰だね」

龍之介はふところを探つて、財布が無くなっているのを確認して言った。

「おわかりのほうです。この店の中であなたの身体に触れた人間、それは一人しかいない」

青年の言葉に、龍之介はようやく犯人を知った。

あの女給だ。

龍之介はあわてて店内に視線を巡らした。

「もうとつくに逃げましたよ」

青年は財布を龍之介に返した。

「きみを取り返してくれたのか」

青年はにこにこしながら、

「もうお帰りなさい。ここはあなたのような方の来るところじゃありませんよ」

と、ウェイターを呼び、勘定をするように言った。

しぶしぶ勘定を済ませると、龍之介は言った。

「きみの名前を覚えてくれないか」

「このあたりではミン・ヂイと呼ばれていますかね」

「しかし日本人なんだろう？」

その問いに青年は笑つて答えなかった。

龍之介を車屋のところまで送ると、青年はいつのまにか姿を消した。

龍之介は悄然として病院に戻った。

こうして龍之介の大冒険はあっけなく終わった。

二

龍之介が支那大陸にやってきたのは、大阪毎日の特派員としてであり、旅行記を書くのが目的である。

だが、それとは別にもう一つ大きな目的があった。正直な話、内心ではこちらの方により大きな興味がある。

それは世界史を書き換えるほどの大きな秘密であり、歴史の深淵に沈んだ秘史を再び白日のもとに曝さらすことでもある。

龍之介はかつて同じような事件に巻き込まれたことがある。日本国の起源に関する事柄だっただけに、友人を失ったうえに危うく命を落としそうになった。

もう秘史探究は金輪際こんりんさいやるまいと心に決めていたのだが、今回はその禁を破った。

その内容があまりにも興味深いのもさることながら、今度ばかりは命の危険がなさそうだからだ。

独身だったあの時とは違い、いまは妻子がいる。命にかかわる危ない真似はできない。最近体調もいまひとつである。

しかし今回は大丈夫だ。しかも大きな成果が期待できそうだ。

正式に退院すると龍之介は、早速その鍵を握る人物にあうことにした。
鄭孝胥——清帝国の遺臣である。

民国政府によって廃位させられた最後の皇帝溥儀に、いまだに忠誠を誓っている。

その日の午後、龍之介は通訳をふたり連れて自動車で鄭氏の自宅を訪問した。

鄭家は鼠色の三階建である。

日本の流行作家の陋屋などくらべものにならない。

それでも鄭孝胥氏は清朝滅亡以来、清貧に暮らしているのだそうだ。

「こんな清貧なら、いつでも歓迎だね」

龍之介はそう言って、通訳二人を笑わせた。鄭氏はけっして嘘を言っているのではあるまい。清の重臣であった時は、宮殿のような大邸宅に住んでいただろうし、妻妾や召使も一人や二人ではなかったろう。

このあたりは日本と尺度が違うのだ。いちいち目くらたてても仕方がない。

応接室に通された龍之介の前に、まず息子の鄭垂が現れた。

「芥川先生、ようこそいらっしゃいました」

小太りの鄭垂は達者な日本語で言った。

彼は日本に留学していたことがある。

龍之介も挨拶を返した。

応接室の中はそれほど豪華ではない。ただマントルピースの上に左右一対の磁器製の花瓶と、黄龍旗が飾られているばかりである。間もなく鄭孝胥が姿を見せた。

いかにも支那の大人という風格があり、老人に似合わずやけに血色がいい。

龍之介は鄭孝胥としばらく時事問題を論じた。特に今後の支那はどうあるべきかという点に、議論が集中した。

「我邦は共和に執着する限り、永久に混乱は免れ得ない」

明晰な物言いだった。龍之介は支那語は耳で理解はできなかったが、それでも言葉の調子で断固たる信念は感じとることはできる。

「では、帝政を復活しますか」

龍之介は尋ねてみた。

「いま必要なのは英雄だ」

「英雄？」

「この錯綜した難局を乗り切るためには、大いなる英雄が必要だ」

それは清朝最後の皇帝溥儀^{ふぎ}を指していないことは明らかだった。しかし、龍之介はその点を確認するのは遠慮した。清朝の遺臣に対して礼を失すると考えたのだ。

「英雄は未だ出現しませんか？」

龍之介の脳裏には、孫文や割拠している軍閥の頭目の名もあつたが、鄭孝胥は質問には冷笑するのみであつた。

龍之介は本題に入るべき時がきたと感じた。これまでの議論はいわば特派員としての立場からのものだ。ひらたく言つてしまえば、新聞社の顔をたてたのである。

これからはそうではない。

龍之介は大きく息を吸い込んで、いままで聞きたくてたまらなかつた質問を口にした。

「最後にひとつ教えて下さい。『玉牒天潢世系』はどこにありますか？」

鄭孝胥は明らかに激しい驚きを示した。

だが、それを押し隠そうとしているのも事実だった。

鄭孝胥は平静な態度を取り戻すと、二人の通訳に丁寧な態度で何か言った。通訳はげんな顔で龍之介を見た。

「いいんだ。鄭氏の言うとおりにしてくれ」

龍之介は、鄭孝胥が二人に席をはずすように頼んだことを、見抜いていた。

二人は結局指示に従った。

彼等がいなくても、息子の鄭垂がいれば意志の疎通に支障はない。

人払いが済むと、鄭孝胥は別人のように鋭い目付きで龍之介を見て、そして言った。

「きみは何故あの書を求めるのかね？」

龍之介は何と答えるべきか、しばらく適切な表現を探すべく、間を置いた。

三

そもそも「玉牒ぎよくちようてんわうせいかい天潢世系」とは一体どんな書物なのか説明しておく必要があるだろう。

その前に唐突だが、源義経みなもとのよしつねのことは御存知だろうか。

日本史上最高の天才的武將にして悲劇の英雄、義経は平治元年（一一五九）源氏の統領源義朝よしともの九男として生まれた。時まさに源氏と平氏の覇権争奪へいじの時代である。

ところが皮肉にも義経の生まれた年に、平治の乱が起こり、父義朝は平清盛たいらのきよもりと戦って敗れたあげく身内の裏切りによって殺されてしまう。